

# F. S. Fitzgerald にみる家族愛

—— *The Curious Case of Benjamin Button* と *Babylon Revisited* の  
原作と映画を通して——

山 中 祐 子

(受付 2011年 8月 23日)

## はじめに

文学において普遍のテーマは生きる意味を問うことであり、それを読者の感性や知性を通じて感動的に伝えることにある。

作家 F・S・フィッツジェラルドは波乱万丈の生涯を失意のもとに閉じた作家である。そのフィッツジェラルド自身が求め続けた精神安住の世界、それは“家族愛”であったと思われる。

ここでは彼が求め続けた“家族愛”の姿を、彼の小説“*The Curious Case of Benjamin Button*” (1922) と“*Babylon Revisited*” (1931) の中から読み解いて明らかにすると共に、彼の実人生とも重ね合わせて検証し、彼が精神の安住の場として求めた“家族愛”とはどんな世界だったのかを明らかにしたい。

解析方法として、原作小説の他に、“*The Curious Case of Benjamin Button*”については近時デヴィッド・フィンチャ監督が映画化して世界的にヒットした“*THE CURIOUS CASE OF BENJAMIN BUTTON*”と、“*Babylon Revisited*”についてはリチャード・ブルックス監督が映画化した“*The Last Time I Saw Paris*” (1954年) (邦題：雨の朝パリに死す)とを対比しながら小説と映画の両面から比較検証する。

ここで映画を分析対象に加えた理由は、フィッツジェラルドの小説では、主題を訴える手法として結末を破滅で終わるストーリーに仕立てているのに対して、映画では、監督や演出家が小説の主題の解釈の結論として、ストーリーを小説とは真反対の愛の賛歌として脚色している点に着目したからである。

なぜ原作の小説と、それを映画化した監督や演出家の表現手法が逆になっているのかを比較検討することが本作品を研究する上で意義あることと考えたからである。

換言すれば、文書芸術と呼ばれる範疇にある小説と、映像芸術と呼ばれる範疇にある映画とはいずれも芸術表現としては近似した要素を持つが、同じ主題を扱う場合でも微妙に違っているのが現実である。それは文書芸術のもつ特性と、映像芸術のもつ特性の差に起因するものであると言える。そのため、片方の解釈をする際、もう一方の解釈を参考にすることは

有用なことであると考えた。特に、ストーリーを大きく変えているフィッツジェラルドの作品については、映像芸術化する際に脚本家や監督がいかに苦しみ工夫をこらしたかを検証することが本質理解に有効であると考えた。

## I. 文書芸術と映像芸術について

一般に映画は、まず小説が発表され、その小説を土台にして脚本が書かれ、それを演出家や監督が映像に仕上げるという過程を経て完成される。

脚本家や演出家、および監督は原作に表現された主題を映像化することによって観客に訴求しようとするのであるが、映像表現は文書表現と異なり、直接観客の視覚に訴えるものであるため長所と欠点を併せ持つ。

すなわち、小説などの文書芸術は、読者が文章を読んで情景や登場人物を心の中に創出し、その意味を思考力を駆使して理解するものであるため、含蓄深い哲学的な言葉の意味も伝えることが出来る。これに対し映像芸術は、全てを映像にして示すため観客は思考力を要することなく受身で理解するだけになり、受け取る側に高度の思考力が働かないという欠点がある。

そのため映像表現するに際しては、文書芸術に比べて思考力を要さなくても主題を正しく理解できるストレートな表現を取らざるを得ない面があり、同じ主題を訴える場合でも両者は異なるアプローチを取るケースが多くなる。

一般に文書芸術や映像芸術において、主題を訴える方法は大別して二種類ある。

ひとつは、主題を肯定的に描く正攻法的手法で、これはドラマを愛と感動の物語に仕立て、読者や観客の感性に訴えて共感と感動を呼び覚まし、生きることの意味や素晴らしさを訴える手法である。

もうひとつは逆説的手法である。これは、ドラマを悲劇に仕立て、生きることの不条理や欲望に生きる人間の醜さや愚かさを顕在化させ、読者や観客の理性や価値観という知的思考力に訴えて、悪や、人間の欲望の醜さを考えさせ、人生の価値や意味を問う手法である。

両者は、アプローチは違うが、いずれも目指すところは同じで、人々により有意義な人生、より価値ある生き方とは何かを解らしめようとするものである。

以下に、「ベンジャミン・バトン数奇な人生」と、「バビロン再訪」の原作と映画の中から家族愛に関する部分を抽出すると共に、彼の実人生とも照らし合わせ、フィッツジェラルドが求めた精神安住の世界とはどのようなものであり、なぜ彼がそこまで書かざるを得なかったのかを検証していく。

## Ⅱ. 「ベンジャミン・バトン数奇な人生」における家族愛

「ベンジャミン・バトン数奇な人生」(以下、「ベンジャミン・バトン」とする)の小説は上述した分類による逆説的手法によって書かれている小説であり、人生という時間が逆転する状況下において、家族というものがどのように形成されるか、その中で家族愛がどのように育まれるか、そして破綻していくのかを浮き彫りにしている。

### Ⅱ-1. 家族の誕生と家族愛

「ベンジャミン・バトン」の小説においては、ベンジャミンの誕生場面から始まる。本来子供の誕生は家族というものの誕生場面である。

だが、老人で生まれたベンジャミンにはどんな家族の誕生が許され、期待されたのか。それを小説では以下のように述べている。

“Where in god’s name did you come from? Who are you?” burst out Mr. Button frantically.

“I can’t tell you exactly who I am,” replied the querulous whine, “because I’ve only been born a few hours—but my last name is certainly Button.”

“You lie! You’re an impostor!”

The old man turned wearily to the nurse.

“Nice way to welcome a newborn child,” he complained in a weak voice.

“Tell him he’s wrong, why don’t you?”

“You’re wrong, Mr. Button,” said the nurse severely. “This is your child, and you’ll have to make the best of it. We’re going to ask you to take him home with you as soon as possible—some time today.”

“Home?” repeated Mr. Button incredulously.” (p. 8)<sup>1)</sup>

これは普通の家族誕生の場面ではなく、家族になることを期待されるのではなく拒否される場面からのスタートである。家族とは何なのか？家族とは生まれれば自然に家族になるのではなく、夫と妻が自分たちの夢を子供の未来に託して育てるから、夫婦、親子という家族愛が培われ、「家族」というものが形成できるのである。その家族形成の要件を読者に考え

---

1) F. Scott Fitzgerald, *The Curious Case of Benjamin Button* (Scribner, 2007) p. 8

させるには、その必須要件を欠いた物語を書けばよいと思いついたフィッツジェラルドは、子供が老人で生まれるドラマを構想した。なぜなら老人で生まれた子供には両親が託すべき未来がないため家族愛を育む基本条件が欠落しているからである。フィッツジェラルドはそういう設定で小説をスタートさせている。

そのため小説では、父親は老人で生まれたベンジャミンに子供服を着せようとするなど親の願望を押し付けるだけでベンジャミンの心を受け入れようとはせず、そのためベンジャミンは父親をはじめ、小説には一度も登場しない母親とも精神的関係を構築できないまま、愛なき孤独の中で育てられるのである。三つ子の魂百までと言うように、以後のベンジャミンの人生は真の愛が得られない空虚なものになってしまう。

これに対し映画では設定が全く異なっている。映画では父親のミスター・バトンは生まれたばかりの我が子が老人であることを受け入れられず、ベンジャミンを老人ホームの前に置き去りにする。そこに居合わせた老人ホームを運営する子供を持たない黒人女性が赤ん坊を見つけ、“You are as ugly as an old pot.... but you still a child of God...” (p. 26)<sup>2)</sup> と、ベンジャミンを神様から授けられたわが子と受け止め、親としての愛情を注いで育てるストーリーになっている。そのためベンジャミンはキリスト教を深く信仰する黒人夫婦の元で、キリスト教精神に基づいた深い家族愛を心に育みながら成長する。

換言すると、映画は、小説のような家族愛なき空虚な世界からのスタートではなく、深い人間愛に満ちた世界からスタートさせ、以後展開するストーリーにおいて、主人公であるベンジャミンが愛情深い人物になる伏線を描きだしている。これは小説の主題が薄幸の生まれゆえの不幸な物語ではなく、愛情深く育った人間においても、老人から若返るという逆の時間を生きる人生の本質的な課題は何なのかをクローズアップするためといえる。

また映画では、普通の子供が友達との交流を通じて成長するように、ベンジャミンは捨てられたところが老人ホームであったことが幸いし、ホームに入居している多彩な経験の持ち主である老人達との交流を通じて、多くの知恵と社会性を学び成長していく設定になっている。

老人ホームでピアノを教えてくれた老婦人はベンジャミンに、“Benjamin... We're meant to lose the people we love. How else would we know how important they are to us.” (p. 92)<sup>3)</sup> と愛の無常を教え、やがて彼女も還らぬ人となる。この挿話は映画の観衆に家族愛の無常性を暗示している。

2) Eric Roth, *The Curious Case of Benjamin Button Story to Screenplay* (Scribner, 2008) p. 26

3) *Ibid.*, p. 92

## II-2. 子供としての家族愛からの脱出

“In 1880 Benjamin Button was twenty years old, and he signalized his birthday by going to work for his father in Roger Button & Co., Wholesale Hardware. It was in that in the same year that he began “going out socially”—— that is, his father insisted on taking him to several fashionable dances. Roger Button was not fifty, and he and his son were more and more companionable—— in fact, since Benjamin had ceased to dye his hair (which was still grayish) they appeared about the same age, and could have passed for brothers.” (p. 25)<sup>4)</sup>

小説では、ベンジャミンが若返って、年取った父親の家業を手伝うようになってから、父親との関係も幾分できてくる。それはベンジャミンが親に依存する立場から脱却し、一人の人間、一人の男として精神的自立を始めたことの表れであった。親子関係は結ばなくても共同作業者としての信頼関係は構築できるのである。

これに対して映画では、ベンジャミンは黒人夫婦に愛情深く育てられたため親子関係には問題がないのでその点にはスポットを当てず、最大の課題は男としての自立と社会性の確立にあると捉えてドラマを構築している。

具体的には、ベンジャミンが老人ホームで知り合って仲良くなった黒人男性に連れられて初めてホームの外の世界に出かける。その黒人男性が女性と待ち合わせていて2人で去って行ってしまったため、ベンジャミンは通りに一人取り残されてしまう。

ベンジャミンが黒人の友人に、“You all alone?” (p. 50)<sup>5)</sup> と尋ねるのに対し、黒人男性は次のように答える。

“Plenty times you be alone. When you different like us, it’s gonna be that way. But I tell you a little secret. Fat people, skinny people, tall people, white people ... they just as alone as we are ... But they scared shitless.” (p. 50)<sup>6)</sup>

そこへ一人で取り残されたベンジャミンは独力で帰らざるを得ず、自分の力で電車に乗ろうとするが、ホームから出たのが初めてであるため電車の乗り方が解らずに電車に乗ることができず、仕方なくホームまで歩いて帰る。この結果ベンジャミンは自分が自立しなければ

4) *The Curious Case of Benjamin Button* p. 25

5) *The Curious Case of Benjamin Button Story to Screenplay* p. 50

6) *Ibid.*, p. 50

ならないことを思い知る。日が暮れてホームに帰ると、ひどく心配した母親クイニーにこっぴどく叱られるものの、ベンジャミンは、It had been the best day of my life. (p. 53)<sup>7)</sup>と心の中でつぶやき、自立の道は厳しいと身をもって知るが、「人生最高の日」と感じるのである。ここにベンジャミンの自立への強い意欲が表現されている。

映画監督や演出家は、時間を逆に生きる人生においては、両親の愛だけでは不十分で、最大の難関は自立の可否にあると想定し、それをベンジャミンがどう乗り越えていくかに焦点を当てたストーリーに組み立てている。これは家族を形成するためには、前提条件に人間としての精神的、経済的自立が重要であるからである。

自立心に芽生えたベンジャミンはホームを出て働きに行く。そこで貨物船のマイク船長と出会い、彼の船の船員として雇ってもらうことになる。船長はベンジャミンを盛り場に連れて行き、生まれて初めて売春婦との遊びを体験させる。

“When I’m dead I’m going to send him my arm! Don’t let anyone tell you different! You got to do what you meant to do! And I happen to be a god-damned artist!” (p. 74)<sup>8)</sup>

マイク船長から上記のように諭されて、人間は他人と違っていいから自分らしく生きる事が最も重要である、ということ学ぶのである。

こうしてベンジャミンは生まれて初めて男としての第一歩を踏み出していく。また、映画における父親との関係構築は、ベンジャミンがわが子であることを知っている父親が、自分が父親であることを隠して近づき、酒を飲みに誘って意気投合し、次第に二人の信頼関係が構築されていく設定になっている。

映画では、父親は自分の死を予期して、ベンジャミンに真実を話し、自分が息子に対して犯した罪を全財産を譲ることで贖罪しようとする。そのひたむきな姿にベンジャミンも心を打たれ父親を許す。ここにおいてベンジャミンの人間としての成長と自立ができたことを証明している。

### II-3. ベンジャミン自身の家族の形成

自分の家族、そして自分の家族愛を築くには、まず結婚と子育てが必要になる。

“They pulled up behind a handsome brougham whose passengers were disembarking at the door. A lady got out, then an elderly gentleman, the another young lady, beautiful

---

7) Ibid., p. 53

8) Ibid., p. 74



as sin. Benjamin started; an almost chemical change seemed to dissolve and recompose the very elements of his body. A rigor passed over him, blood rose into his cheeks, his forehead, and there was a steady thumping in his ears. It was first love.” (pp. 26–27)<sup>9)</sup>

小説では上記のように、ベンジャミンはシェブリン家の舞踏会で未来の妻ヒルデガルドと出会う。ベンジャミンはヒルデガルドと胸をときめかしながら踊っているとき、“I like men of your age,” (p. 28) と言ったヒルデガルドの一言から、年齢差を乗り越えた恋愛ができることを察知し、若いヒルデガルドとの恋愛を成立させるのである。そして二人は結婚し、家族の最小単位を形成する。

新婚時代は、ベンジャミンは妻を崇拜してダンスや夕食に誘い、仲むつまじく暮らし、そのうち息子ロスコーを授かった。これで家族愛を構成する要件が整い、ベンジャミン一家の家族間の信頼と愛情は深まっていった。

しかし、幸せな家族関係は長続きはしなかった。なぜならベンジャミンは益々若返り生気みなぎるようになっていくのに対し、妻ヒルデガルドはその蜂蜜色の髪も茶色に変色し、青いエナメルのような瞳は安物陶器を連想させるものに色あせてくる。なによりも妻がひどく自分勝手に、何かを楽しもうとする気力がなくなり、つまらない人間になったと感じ始める。そして妻への関心は失せていった。これが家族崩壊の始まりである。

ここでは、夫婦間の家族意識というものは、両者が異性として求め合っている期間は問題ないが、そういう関係が途絶えると、夫婦愛だけでなく家族愛も崩壊していくことを示唆している。

更に時が経ち、ベンジャミンが青年から少年になっていく中で、妻とだけでなく息子との関係も崩壊していく。息子ロスコーは大人になり、父親に代わり家業を引き継ぎ一切を取り仕切るように成長していくが、息子には若返る父親の存在が世間に対して恥ずかしく目障りなものになってくる。

ロスコーは子供化していくベンジャミンに次のように言い放つ。

“And another thing,” continued Roscoe, “when visitors are in the house I want you to call me ‘Uncle’ — not ‘Roscoe,’ do you understand? It looks absurd for a boy of fifteen to call me by my first name. Perhaps you’d better call me ‘Uncle’ all the time, so you’ll get used to it.” (p. 43)<sup>10)</sup>

---

9) *The Curious Case of Benjamin Button* pp. 26–27

10) *Ibid.*, p. 43

実の親子であっても、家族愛や信頼感情は二人の関係性によって構築・維持されるものであって、その関係性が傷つくと家族愛も簡単に壊れていくことを示している。

以上を総括すると、ベンジャミン・バトンは幼い時は、存在を無条件に肯定されるという家族愛を受けることなく孤独に育てられ、青年期から壮年期の期間には、形ばかりの父親との親子関係を築き、結婚後しばらくの間は、夫婦としての時を過ごすが、いずれも僅かの期間に崩壊していき、結局、ベンジャミンは家族の愛に恵まれないまま孤独の人生を閉じることになるのである。

この小説の経緯は、後で述べるフィツジェラルド自身の実生活における愛の系譜と大きく重なっている。

これに対し、映画では、老人ホームの入居者が連れてきた少女デイジーと出会い、そして彼がホームを出て数年後にホームに里帰りしたとき、青年に若返ったベンジャミンと娘に成長したデイジーが再会して恋におちる。この時、既にデイジーはバレリーナの道を歩んでおり、二人の道は交わらない運命を辿っているように思えた。しかし、デイジーがパリで自動車事故にあって入院していることを知ったベンジャミンがパリの病院まで会いに行く。足を大怪我してバレリーナの道を断念せざるを得なくなっていたデイジーは、一度はベンジャミンを拒むものの、長い苦悩の末にベンジャミンとの愛に生きることを決意して、二人は結婚するのである。

結婚までの愛の系譜は、小説では一目惚れに近い衝動的なものに描かれて、いとも簡単に結ばれるが、映画では異なった道を歩む二人が、どのような経緯の中で相手を理解し、強く慕う心情に深まっていくかを納得できる形で描きだしている。

“They look at each other in silence ... and they simply smile, so glad to see each other after all the missing years ... They embrace .... for some time ... As people who haven't seen each other.. , and have thought about eachother ... for a very long time ... And it just is ... no big symphonies, no endless skies ... just, two people at a kitchen door in the middle their lives...and the simplicity, just that, is what makes it real and breaks your heart.”  
(p. 202)<sup>11)</sup>

こうして二人は、お互いに相手の人生の挫折を理解する深い精神的結びつきを持って愛情深い結婚生活を送り、娘にも恵まれる。

しかし、どんなに深く家族を愛していようが、年々若返るベンジャミンには愛する娘の父

---

11) *The Curious Case of Benjamin Button Story to Screenplay* p. 202



親としての役割を一生続けていくことができなくなることは明白であり、このことを悩んだベンジャミンは、自分の妻子を幸せにするためには、自分でない普通に年取る男性の父親が必要なことを受け入れ、娘に自分の記憶が残る前にすべての財産を妻に譲って、自分は姿を消すことを決断する。

“I sold the summer house on Lake Pontchartrain ... I sold Button's Buttons ... I sold the sailboat ... I put it all into a savings account ... And so that you and your mother could have a life, I left before you could ever remember me...” (p. 247)<sup>12)</sup>

このベンジャミンの決断は、自分の家族を愛するがために、自分の人生を捨てるという究極の家族愛の姿である。

換言すると、映画のベンジャミンは家族愛に命を捧げる人生を選択するのである。別れた後に一度だけ妻子の無事を見にいくのだが、大きく育った娘に父親とは名乗らないまま去っていく。

ここには、家族とは逆の時間を生きるベンジャミンが、真に家族を愛するということがどういうことなのか、その悲痛な答えを示している。父親として家族を守るために自分を捨てるベンジャミンの生き方は、観客に驚きと感動の涙を誘う。

以上に述べたように、小説と映画では家族愛の描き方が全く逆になっている。

では、映画の監督や演出家達は小説を読んで、その主題をどう解釈したのだろうか。そしてその解釈を訴えるのにどのような映像表現が適切だと考えたのだろうか、監督等は激論を重ねた結果、映画に見る表現になったと言われている。

時間を逆さに生きるベンジャミン・バトンの物語の主題を、小説では破滅的手法で表現しているが、映画監督等はこの物語の主題は“人生における家族愛”にあると解釈し、それを映像表現で観客に効果的に理解させる手法として、自分を捨ててまで家族愛に生きる男の物語へと脚色したのである。その方が小説にみる破滅的表現よりも観客に訴えるには効果的であると判断したからに違いない。

作家フィッツジェラルドは、文学においては破滅的表現の方が真実味や哲学性を表現できるとされた風潮に乗った表現方法を用いているが、彼が真に描きたかったものは映画の方にこそ素直に表現されているものと考えられる。

---

12) Ibid., p. 247

### Ⅲ. 「バビロン再訪」について

「バビロン再訪」はフィッツジェラルドの自伝小説とされている。そしてそこには彼の家族への熱い思いが込められている。それを小説から探してみる。

小説では

“... The image of Helen haunted him. Helen whom he had loved so until they had senselessly begun to abuse each other's love, tear it into shreds. On that terrible February night that Marion remembered so vividly, a slow quarrel had gone on for hours. There was a scene at the Florida, and then he attempted to take her home, and then she kissed young Webb at a table; after that there was what she had hysterically said. When he arrived home alone he turned the key in the lock in wild anger. How could he know she would arrive an hour later alone, that there would be a snowstorm in which she wandered about in slippers, too confused to find a taxi? ...” (p. 223)<sup>13)</sup>

とあるように、これは、「ベンジャミン・バトン」と同様に、最初は愛し合って夫婦になった男女が、時間の経過、お互いの趣味の違い等から段々に心の波長がずれていき、諍いをおこし、そんな中での感情的激突が取り返しのつかない破滅をもたらしてしまうという小説である。主人公チャーリーは日常茶番な夫婦喧嘩の行き違いが原因で、愛する妻ヘレンを死なせてしまう。その結果、チャーリーは娘オエリアの親権を義姉マリオンに取り上げられ、チャーリーは家族を喪失してしまい、失意の中でパリから逃げるようにしてプラハに行き再起を図る。そして1年半後、

“From behind the maid who opened the door darted a lovely little girl of nine who shrieked “Daddy!” and flew up, struggling like a fish, into his arms. She pulled his head around by one ear and set her cheek against his. “My old pie,” he said. “Oh, daddy, daddy, daddy, daddy, dads, dads, dads!” (p. 212)<sup>14)</sup>

主人公のチャーリーは、自分の放蕩の結果、姉夫婦に預けざるをえなかった娘との再会を、理想的な形で迎える。

13) F. Scott Fitzgerald, *Babylon Revisited and Other Stories* (Scribner, 1960) p. 223

14) *Ibid.*, p. 212

チャーリーは、パリで妻の姉夫婦の家を訪ね、自分は酒びたりの放蕩生活から足を洗い、今では真面目に生活していること、そして仕事も順調で経済的にも娘をしっかり育てられるようになったことを姉夫婦に話して娘の親権を返してくれるよう懇願する。義兄はすぐに理解を示すが、義姉は過去のチャールズの放蕩生活を知っているために、信用しようとしな

“Darling, do you ever think about your mother?”

“Yes, sometimes,” she answered vaguely.

“I don’t want you to forget her. Have you got a picture of her?”

“Yes, I think so. Anyhow, Aunt Marion has. Why don’t you want me to forget her?”

“She loved you very much.”

“I loved her too.”

They were silent for a moment.

“Daddy, I want to come and live with you,” she said suddenly. His heart leaped; he had wanted it to come like this.

“Aren’t you perfectly happy?”

“Yes, but I love you better than anybody. And you love me better than anybody, don’t you, now that mammy’s dead?” (p. 218)<sup>15)</sup>

この一節には、主人公チャーリーが求め描いた家族像が示されている。そこには、愛し合い求め合っている夫婦と、親に無条件に愛される子供とが織り成す幸せな家庭像が見える。そして更正したチャーリーが、自分が今後生きていくために、心の糧として娘との暖かい家庭を作ることだけが望みだという主人公の切ない姿を描き出している。

この点について、山口格氏は「Babylon Revisited 論—— Charlie Wales の自己認識について」の中で、次のように評している。

「……Charlie は……空漠とした生を生きてきたことに対する罪の意識故にこの場では孤独な存在なのである。然し、彼の現在の自己回復と節酒に示されているような節制とが強調されているだけに、つぎの会話では彼の過去の生活に於ける無責任と道徳的罪とが最も辛辣な形で浮き彫りにされているのである。」(p. 89)<sup>16)</sup>……

「……幼馴染の人間さえ、彼に娘がいたことを知らないという事実は、家庭に対する責任というものを彼が放蕩な生活の中で如何に等閑にしていたかを物語っている。娘を

15) Ibid., p. 218

16) 山口 格著、『Babylon Revisited 論 Charlie Wales の自己認識について』PHOENIX 16 1980 p. 89

取戻したいという希望を実現するために彼が有している価値は自己回復と節制であるが、無責任と道徳的罪のうちに過ごした過去は、その価値を脆弱化してしまう暗い力をもっている。」…… (p. 89)

しかし、姉夫妻の元に何度も通ううちに義姉マリオンの不信感も和らぎ、あと一押しで許してもらえるところまで漕ぎ着けた矢先、チャーリーの昔の悪友達が皆の前に現れて騒ぎ、チャーリーがまだ彼等と同じ世界にいるとマリオンに誤解され、親権を取り返すことに失敗する。そして最後にチャーリーは一人寂しくパリの街並の中に消えていくのである。

ここには、自らの失敗で愛する家族を失った者は、再び過去の愛情溢れた幸せな家族を取戻すことは出来ないということを、悲しい結末で訴えている。

換言すると、人生において家族と家族愛は、人が生きる心の基盤としてかけがえの無いものであることを訴えているのである。

一方映画では、米軍中尉の主人公チャールズはパリで出会った奔放で積極的なヘレンに誘惑されるままに恋愛し除隊を期に結婚する。しかし、遊び好きのヘレンは家庭を顧みず朝帰りを繰り返すようになる。そんな妻に不満を抱いているチャールズも仕事を通じて美女と知り合い仲良くなる。

フィツジェラルドの小説では、男女の出合いと、愛の崩壊はいつもこのような軽いタッチで始まり、そして終わる。これはとりもなおさず後述する彼の実生活での愛の獲得とその喪失体験が重なっているからだと思われる。

いつしかチャールズとヘレンはバラバラの放蕩生活をするようになり、ある雪の夜、酔っ払ったチャールズがドアチェーンを掛けてヘレンを締め出したことが原因でヘレンを死亡させてしまう。これを知った姉のマリオンは飲んだくれのチャールズには娘ベッキーの親権はないと訴えて、親権を取り上げてしまうのである。それによってチャールズは家族の全てを失う。失意のチャールズはやむなくアメリカへ帰国する。

そして2年後に生活力を回復したチャールズが娘をパリまで迎えに来たのである。

『『まだ酒場に通っているの?』『先の保証はあるの?』とマリオンは問い詰める。

『娘と暮らしたい。お願いだ。家族を失いたくない。娘が一緒だとヘレンもいるように……』『マリオン、お願いだ。娘を返して。』』

しかしマリオンはチャールズへの不信感から決して親権を手放そうとはしなかった。

だが、チャールズが帰ったあとで、元チャールズの戦友で今はマリオンの夫になっているクロードがマリオンに言った。

『彼は許せない罪を犯した。君に対してね。君の彼への愛に気付かずヘレンと結婚した。』『彼を最も苦しめるには最愛の娘を奪うことだ。』『子供も欲しかった。失意からでなく愛から生まれる子供が……』』

この言葉は、クロードがマリオンに求める家族像の本心を露にしている。夫からこの言葉を聞いたマリオンは衝撃を受け、夫の愛に応えるためベッキーを手放すことを決意してチャールズに引き渡す。そして最後にチャールズがベッキーと手をつないでパリの街に消えていくハッピーエンディングで終わる。

映画の脚色では、マリオンがベッキーを手放さないのは復讐心からで、不純な動機であることをクローズアップすることにより、チャールズの純粋な家族愛が成就するストーリーに仕立ててある。

ここで、小説と映画を対比して理解できることは、「ベンジャミン・パトン」や「バビロン再訪」においては、ラストがハッピーになるか否かというストーリー展開に重要性があるのではない。それゆえストーリーが小説と映画で違っていても許されるのに対し、違ってはならないもの、それは、原作に書かれた主題が同じであることであり、その主題を読者や観客に感動的に訴えることができているか否かにあると言える。この視点から原作と映画を比較してみると、ストーリーには違いがあるが、いずれも課題を感動的に読者や観客に訴えることができていると言える。

また、バビロン再訪を別の視点から見ると、次のようなことが類推される。それは作者が大衆受けする小説を構想するとき、その主題に取り上げるものは大衆の関心を惹き易い小説や短編などに収斂するのが一般的であるので、わが子の親権を回復する物語などは売れないと判断され、出版社に取り上げてもらえないのが普通である。しかし、フィッツジェラルドはそれを書かざるを得なかったに違いない。何が彼にそれを書かせたのだろうか。その答えを推察するに、彼の心は、後述するように妻も娘も失い、懺悔の情に苛まれ、苦悩し、極度の孤独の中で自分を救い出す最後の望みを、娘との再会と家族の再建に賭けていたからだと思われる。つまり、「バビロン再訪」はフィッツジェラルド自身の懺悔物語なのである。

「ベンジャミン・パトン」も「バビロン再訪」も、その主題である“愛”，特に揺るがない“家族愛”が、人間が人生を希望を持って生きていくために、希望を持ち続けるために、いかに根源的で大切なものであるかを訴えている。そしてそれがフィッツジェラルドの切望する安住の境地であるに違いない。

#### IV. 家族愛とは何か

なぜ人間は誰もが家族愛を必要とするのか？そして家族愛とはいったい何なのか、どのような根源性を持つ愛情なのか、それを検討してみたい。

家族の最小単位は夫婦であるが、そこに子供ができると家族愛・親子愛というものに変質する。夫婦愛と家族愛は何が違うのか？夫婦愛という場合、それは男女の愛を柱とする面が強いが、そこに子供が誕生することにより、自分達の子孫の繁栄という目的共有型の強い結びつきに変質していくと考えられる。一般的には、親が自分の子供に対して自分の分身としての感情移入や夢の伝承をすることにより、自分の生命の延長線にある生命と認知するからであろうと考えられている。

これは、「遺伝子の……もう一つの側面は、それが老衰しないことである。遺伝子は百万歳になっても、百歳位のときより死に易くなるわけではない。それは、自分の目的に合わせて自分のやり方で次から次へと身体を操り、死ぬべき運命にある身体が老衰や死にみまわれないうちに相次いでそれらの身体を捨て、世代を経ながら身体から身体へと乗り移っていく。」(The Selfish Gene 『利己的な遺伝子』<sup>17)</sup>) という遺伝子論の考え方として知られている。

生命体における種の保存本能は強烈なもので、魚や昆虫等は子孫を作るとすぐに死滅するものも多くある。要するに動物においては種を繋いでいくことこそが使命であり、種の保存は本能として命懸けで守るように植えつけられているものと言える。

一方で子が親を慕う心情は何なのか？これは社会環境的に刷り込まれた心情だと考える。

人間は、生まれてから普通十数年間は親の庇護と愛情の元で育てられる。この間に子供の精神には、親は自分と一体不可分な存在として刷り込まれていく。そのことによって、人間の精神には親は自分のために命を賭けてくれたかけがえのないもの、親の恩に報いようとする心情を強く持つに至る。この心情も家族や一族を守ろうとする遺伝子の作用の一つと言われている。このように遺伝子は人間に仕込まれた種の保存本能の核心を司るものであり、家族愛を形成する根源のエネルギーであると考えられる。

#### V. フィッツジェラルドの実生活にみる家族愛

フィッツジェラルドは1896年に生まれ、それまで女ばかりの姉妹の中に生まれた初めての男の子であったため、母親から過剰な溺愛を受けて育てられる。一方1900年にゼルダ・セイヤー

---

17) 日高敏隆他訳、リチャード・ドーキンス、『利己的な遺伝子』紀伊国屋書店 2006 p. 48



が生まれている。ゼルダは16歳のとき（1916年）バレエのリサイタルで成功して社交界のスターになる。これを機にゼルダはダンスよりも自己顕示欲を満たしてくれる男性やパーティに熱中するようになる。

1918年にフィッツジェラルドとゼルダは知り合い恋愛する。そして紆余曲折を経て1920年に二人は結婚する。そして翌1921年に娘スコッティが生まれる。

1924年夫妻は再び渡欧し、このときマーフィ夫妻と親交を結ぶ（マーフィ夫妻が「バビロン再訪」の義姉夫婦のモデルと思われる）。ゼルダはフランス人飛行士エドワール・ジョーサンと恋愛し、自殺未遂事件を起こす（この事件が「バビロン再訪」でのヘレンの浮気話のモデルと思われる）。

1927年フィッツジェラルドは「偉大なるギャツビー」の映画化のためハリウッドに行き17歳の女優ロイス・モーランと知り合い、不倫騒動を起こし、その後の度重なる夫婦喧嘩の原因になる（この関係が「バビロン再訪」で共にドライブする美女ロレインのモデルと思われる）。

1930年～1932年にゼルダは統合失調症を患い入退院を繰り返す。それに伴い娘スコッティ（12歳）は親戚に預けられる（これが「バビロン再訪」での、義姉夫婦に娘オエリアを預けるモデルと思われる）。

また、「バビロン再訪」の著述は上記期間に行われ、1931年に発刊されている。

ここでフィッツジェラルドの実生活における“愛”に関する内面について考察する。

まず最初に娘 Scottie に関する著述から検討すると、スコッティをモデルにしたと思われる“*The Baby Party*”（1925）の中で2歳半の少女 Edo に対して、次のような記述がある。“When John Andres felt old he found solace in the thought of life continuing through his child.”（p. 209）<sup>18)</sup> すなわち、子供は自らの命の継承者であると本能的に認識しており、これは前述した遺伝子論と同質な認識と言える。

“The dark trumpets of oblivion were less loud at the patter of his child’s feet or the sound of his child’s voice babbling mad non sequiturs to him over the telephone ... and he came to look forward to one of the vivid minutes of his day.”（p. 209）

とあり、ここには子供が自らの傷心を癒してくれる存在であると述べてある。このことは同時期に実生活で起きていた妻ゼルダの統合失調症と、アル中によって崩壊していた自己を再生するのに、愛する娘スコッティとの家族愛が大きな力になったことを示している。

また、フィッツジェラルド自身のもつ愛の本質については、「スコット・フィッツジェラル

---

18) F. Scott Fitzgerald, *The Stories of F. Scott Fitzgerald* (Scribner, 1920) p. 209

ド——自己愛に見るロマンス」で 照山雄彦氏が下記のように述べている。

「……彼が「ナッソー文学」に書いた作品から読みとることができるのは、登場人物はすべて美男か美女で、利己心が強く、……、女性がその相手とどんな恋愛関係を持つかというリアリティよりも、破滅性を導くものとしての女性であることが重要であるように作品に表出されている。すなわち彼女達は、……、誰でもが持っている日常的な自己愛が過度に肥大化して自分を理想化し、また自己愛を満たすことだけが、彼等の心の悩みになってしまっていて、食欲も性欲も自己愛を満たす手段だけのものになっているように書かれている。そしてそのことが、フィッツジェラルド自身の観念として生涯にわたって演じていくことになる。」(pp. 31-32)<sup>19)</sup>

そして「……彼の恋愛観や人生観は、男女の存在する調和のある合一ではなく、また、男女がそれぞれの生命感を感じ取るような喜びではなく、幸福への熱烈な反応を見いだしたということでもなく、また、愛する存在の幸福に対して熱烈に答えたいという願望でもない。そこにおいて男性の幸福が女性に、また女性の幸福が男性にそれぞれが相手の幸福と溶け合うことによって、より豊饒なものになるような関係としてのロマンスは、フィッツジェラルドの作品からみることができない。」(p. 32) と評論している。

上記に示されたのは、フィッツジェラルドの精神が求める愛の形は、相手の幸せの為に自己犠牲も厭わない“与える愛”ではなく、自己の欲望、自分の不安解消のために他者から与えられることを望む“欲する愛”だといえる。照山雄彦氏の定義でいうとフィッツジェラルドの家族愛は所詮彼の自己愛の延長線上にあるものに過ぎないとのことである。

精神の根幹にこの種の狂信的ともいえる自己愛を持つ人間においては、夫婦のいずれか片方が“与える愛”を有していれば破滅に至らないですむが、ゼルダもまた少女期からスターとしての自己愛を生きてきたため、その精神も“欲する愛”を生きる人間であったが故に、二人の愛は破綻する。

しかし、“欲する愛”の持ち主は、家庭や家族愛を求めないわけではなく、逆にその孤独性ゆえに、普通の人より強く家族愛を欲する人間になるように宿命づけられている。

フィッツジェラルド自身もその孤独の中で酒に溺れ、自分を見失っていったのである。そんな彼が自分を立て直し得るのは、唯一、崩れそうな自我を支えてきた彼の家族愛だったと思える。

そんな彼がどうして「バビロン再訪」のような告白的小説を書いたのか、書かずにはいら

19) 照山雄彦著、『スコット・フィッツジェラルド—自己愛に見るロマンス』栄宝社 2004 pp. 31-32

れなかったのか？いくつかの評論では、彼は自己の内面を見つめ、そこから小説を生み出す作家だと言われている。しかし本当はそれ以上の理由、すなわち、彼が告白的小説を書くのは彼の精神の安定を保つための唯一の逃げ道であって、彼は脅迫観念に追い回されるように告白小説を書き続けたのだと思われる。

精神分析用語に“カタルシス効果”というのがあるが、彼にとって小説は、まさに彼の精神を破壊から防衛する逃げ道だったのではないだろうか。彼も多くの天才がそうだったように、精神が破綻する瀬戸際を生きて、そこで自分をなんとか維持できたのが彼の告白小説による“カタルシス効果”にあったのだと思わざるをえない。

だからこそ、その愛が、“利己的な遺伝子”論的な自己愛であったとしても、それがフィッツジェラルドを人間として支える最後の砦であったのだと思うと、彼が小説「バビロン再訪」に描いた家族愛に対する切ない思いへの理解を深めさせる。

## VI. お わ り に

総括すると、フィッツジェラルドは小説「ベンジャミン・バトン数奇な人生」の中で、家族愛というものは、人に生まれながらに与えられている愛の形ではなく、後天的に親や周囲から与えられ育まれて形成されるものであることを明らかにし、家族愛のない人生の孤独と虚しさを破滅的なストーリーを介して訴えている。

これを肯定法で表現すると、映画のように愛の賛歌型ストーリーとなり、家族愛は人間に大きな生きる意味や価値、そして生きる勇気を与えてくれる根源的価値であることを感動的に教えている。

そして「バビロン再訪」は、フィッツジェラルド自身の生きた軌跡を辿る告白的なストーリーになっており、そこに描かれた家族愛の世界は、若き日に過ちを犯した人間が、その過ちを悔いて、人生を建て直し、再び人間らしい充実感ある人生を生きるためには、家族というものが、家族愛というものがいかに貴重なものであるかを訴えている。

換言するなら家族愛なき人生は孤独で空虚なものであることを訴えているのである。

「バビロン再訪」における小説も「ベンジャミン・バトン数奇な人生」の小説と同様にフィッツジェラルド特有の破滅的ストーリーでの訴求方法が取られているのに対し、映画では肯定的手法での訴求方法をとっている点に違いはあるが、訴えている主題は同じである。

そしてフィッツジェラルド自身の人生と対比してみると、*「バビロン再訪」*で訴えた“過ちを犯した人間が家族愛なしで生きることの孤独と虚しさ”は、フィッツジェラルド自身の実人生の嘆きであったことが悲しいほど伝わってくる。

人間は、己の欲望に生きることに価値を置くことが多く、自分に与えられている家族愛の

価値について、無関心・無理解なケースが多い。それは失われて初めて自覚できるものもあるが、失う前にその価値とかげがえの無さを知らなくてはならないことを改めて思い知らされる。

### Bibliography

- Clauridge, Henry, *F. Scott Fitzgerald Critical Assessments Volume III* (Helm Information)
- Compton, D; Rosich, R; Rothaupt, J.W; Flom, B *The Curious Case of Benjamin Button* (Journal of Feminist Family Therapy, 21, Part4, 2009) p. 284–287
- Fenster, Sandra, *Film Essay; The Curious Case of Benjamin Button; Regression and The Angel of Death* (International Journal of Psychoanalysis, 91, no3, 2010) P. 643–650 Blackwell Publishing
- Sinshin, Alexander, Charlie Wales's Purgatory in Paris: An interpretation of F. Scott Fitzgerald's "Babylon Revisited" (TABARD 115, 2000)
- Taubin, Amy, *The Curious Case of Benjamin Button—Time Is out of Joint in David Fincher's melancholy reverie* (Film Comment. 45, no1 (2009): 30 New York: Lorien Productions)
- Tyree, R, M, *Against The Clock: Slumdog Millionaire and The Curious Case of Benjamin Button* (Film Quarterly, 62, no. 4 (2009) 34–38 University of California Press)
- An Old Soul—Claudio Miranda Exploits Cutting-Edge Technologies on The Curious Case of Benjamin Button* (American cinematographer. 90, No1 (2009): 42 Hollywood, Calif. ASC Holding Corp.
- 足立富美著、『回想のスコット、フィッツェラルド（その4）“Babylon Revisited”（雨の朝パリに死す）』学苑 1973
- 伊藤義生著、『‘Babylon Revisited’ 試論』藤大学紀要 15 1978
- 小堀用一郎著、『スコット・フィッツェラルド 人と作品』弓書房 1987
- 高橋美知子著、『Zelda Fitzgerald, “Scottish Girl”に見る幸福感』西南学院大学大学院文学研究論集 21 p. 33–46
- 坪井清彦著、『破滅の影 F. S. フィッツェラルドの生涯と作品』あほろん社 1976
- 馬場雅典著、『“Babylon Revisited” 論—現代社会における Charlie Wales の共同体感覚—』九州女子大学紀要 27.1 1991
- 藤澤良行著、『Charlie Wales の彷徨』— F. Scott Fitzgerald “Babylon Revisited” 研究—大阪樟蔭女子大学 英米文学会誌 37 2003
- 福屋利信著、『‘Babylon Revisited’ —ジャズ・エイジの内省』山口大学英語教育研究会 4 2000
- 西尾 巖著、『フィッツェラルドとヘミングウェイ—‘Babylon Revisited’ の技法をめぐって—』教養諸學研究 97–98 1995
- 西山定夫, 坪井清彦著、『完訳フィッツェラルド伝』こびあん書房 1988
- 西山久子著、『父と娘：Fitzgerald の自己再生と Scottie』甲南女子大学大学院論集 文学文化研究編 p. 1–6 2004

## SUMMARY

### Love of Family as seen in F. S. Fitzgerald's Short Stories

Yuko Yamanaka

This paper examines “love of family” which is seen in *The Curious Case of Benjamin Button* (1922) and *Babylon Revisited* (1931) by F. S. Fitzgerald.

As a means of clarifying the theme, the originals of the two stories, their film versions and the author's real life are taken up and examined. The originals and the films are analytically compared and the meaning of the difference in the stories between them is considered.

In the original of *The Curious Case of Benjamin Button* the life of the protagonist is described as fruitless. Since he does not share his future with anybody, he does not gain “love of family” which is essential to the formation of the family.

The film *The Curious Case of Benjamin Button* describes impressively that life becomes fruitful. Even though the time of life reverses, the protagonist protects his family by sacrificing his own life.

In *Babylon Revisited*, the protagonist loses his family because of himself and amends his conducts, but he never regains the full love of his family. In the “Last Time I Saw Paris,” which is the film version of *Babylon Revisited*, the protagonist finally succeeds in regaining his daughter. It leads to a happy ending.

In view of the real life of Fitzgerald, *Babylon Revisited* is considered as the confession of his own life. It is clear that he eagerly desired to rebuild his own family with full of love, attempting to recover himself and his family.

We can assume that Fitzgerald expressed his own agonies of “love of family” in his short stories. Fitzgerald appeals that we do not know the value of love of family until we have lost it.